

新庄まつりが巣鴨にやってきた！

絢爛豪華な山車と 囃子の響きが 巣鴨をつつみ込む！



ユネスコ無形文化遺産にも登録された「新庄まつり」の大掛かりな山車と囃子を、東京・巣鴨に移して「新庄まつりin巣鴨」が行われた。初の試みを成功させた新庄市と巣鴨の人々の奮闘ぶりを裏話を紹介する。

取材・文 ● 保田明恵 撮影 ● 河野利彦、編集部



1 初めて見る山車に、巣鴨の人たちは大興奮。2 大太鼓、小太鼓、笛、鉦、三味線で囃子を演奏。3 巡行を前に、気合十分の形若連たち。4 大正大学構内では、玉こんにやくや新庄焼きそばなど、山形県の名物料理も販売された。

新庄市の人々の手で 大切に守り続けてきた祭り

「チエレンコヤッサー」の勇壮な掛け声とともに、鮮やかな色彩が施された絢爛豪華な山車が町を練り歩き、まつり囃子の独特なしらべが祭りムードを盛り上げる――。

去る10月28日、29日の2日間、山形県新庄市の「新庄まつり」を東京・巣鴨に場所を移した「新庄まつりin巣鴨」が開催された。主催は巣鴨にある大正大学と、同大と巣鴨の3商店街でつくる「一般社団法人コンソーシアムすがも花街道」だ。

新庄まつりは毎年8月24、25日の3日間、山形県新庄市で行われる祭り。2016年（平成28）「山・鉦・屋台行事」として、ユネスコ（国連教育科学文化機関）無形文化遺産に登録されたのも記憶に新しい。

祭りの起源は江戸中期の1756年（宝暦6）。前年の大凶作による飢えや疫病に心を痛めた時の藩主・戸沢正護公が、領民



無事に祭りの日を迎え、晴れやかな表情の山尾新庄市長。

を励まし、五穀豊穡を祈願して行ったのが始まりとされる。以来、少しずつ形を変えながら、民衆の力で今日まで守られてきた。

祭り実現に向け、 多方面の人々が動いた

今回の祭りは、「ユネスコ無形文化遺産に登録された新庄まつり」で、地方と東京の共生を実現し、巣鴨の地域振興にもつなげたい」と、大正大学が新庄市に祭りの派遣を依頼したところから話が始まる。そのときのエピソードを、山尾順紀新庄市長はこう明かす。

「山車は1台でも2台でもダメ、最低3台をお招きいただいたらお応えしましょう」と、生意気な返事をしました」

20台もの山車の行列が、見る者を圧倒する。本場、新庄まつりの神髄に触れてもらうには、「最低3台」は譲れない条件だった。新庄まつりがほかの地域に派遣されるのは、実は初めてではない。だが今回の巣鴨は、巡行ルートが商店街に設定された点が、これまでとは大きく違ったという。

新庄市商工観光課主査で、あらゆる立場の調整役を担ったという長倉薫さんは、「商店街に初めて来たとき、人の多さに驚きま

した。ここで山車を曳いたらすごいだろうなと、皆さんに見てもらおうの楽しみにしてきました」と話す。

だが、人がひしめく場所には懸念材料も多い。新庄山車連盟会長の木村満さんは、長年、山車を動かしてきた立場から、「道路の幅が狭く、路面電車の踏切をまたぐルートを見て、簡単にはいかないぞ」と思いました。安心、安全でなければ祭りは続きません。派遣先の事故など、もつともあつてはならないこと」と、気を引き締めた。準備期間の1年間、長倉さんや木村さんたちは何度も巣鴨を訪れ、巣鴨警察署とも

話し合い、安全な巡行に向けてスケジュールを練り上げた。また、山車の高さも商店街に合わせた仕様にするなど、巣鴨派遣のため入念な準備を行った。

3つの商店街も大正大学からの話を受け、全面的な協力を惜しまなかった。巣鴨駅前商店街振興組合理事長の長島眞さんは「地域に生かされてきたお返しをしなければ」と、根底にある思いを語る。

会場の設営、ポスター作成、現場の警備など、要所ごとに運営を支えたのが大正大学地域創生学部2年生の学生たちだ。学生の全体統括を務めた根本大我さんは、

3台の山車が 巣鴨のまちを巡行

山車は能や歌舞伎、歴史物語などから題材を取り、山車若連によって毎年新しくつくられる。巣鴨にやってきた山車がそれぞれ、何を表現しているのか紹介しよう。
(写真提供・新庄市)



風流「黄金の茶室」

豊田秀吉が造らせたすべて金箔張りの黄金の茶室に、徳川家康と伊達正宗を招いて茶会を催した場面を再現。



風流「碓知盛」

源義経に復讐を回った平知盛が失敗し、碓を背に海底に沈みゆく悲壮な最期を迎える。浄瑠璃や歌舞伎で演じられる「碓知盛」の名場面。



風流「助六由縁江戸桜」

歌舞伎の演目「助六由縁江戸桜」の1シーン。盗賊から刀を奪い返した主人公の助六は、追われる身となり、天水桶の中に隠れる。

8月の、本場、新庄まつりに曳き手として参加し、「地域の人たちが魂をかけて行っている祭り」を感じたという。

「だからこそ、新庄市の熱い気持ちに伝える祭りをつくり上げたいと、学生たちにかげ声などの意味を一つひとつ説明し、現地の人々にとってどれほど大事な祭りなのかを伝えていきました」（根本さん）

豊島区民も曳き手に加わり 往復4kmの道のりを巡行

ついに迎えた1日目。生憎、台風22号の影響で、時に降り出す雨に関係者がやきもきする中、メイン会場の大正大学構内でオープニングセレモニーがスタートした。

町内単位で結成される山車若連と呼ばれるチームが、3カ月あまりかけてつくり上げる自慢の山車3台がお披露目された。等身大の人形を中心に、館、花、波、馬などが配されたきらびやかな装飾に早くも見物客の目は釘付けだ。

学生による山車の紹介や、山車若連とは別の町内で結成される囃子若連によるお囃子も演奏され、祭りへの期待が高まる。

そして待ちに待った巡行開始。3台の山車は構内を巡回したあと、巢鴨中心市街地へと出発した。ここから3つの商店街を縦断し、JR巢鴨駅まで続く片道約2kmの道

のりを、3時間ほどかけて往復する。

まずは庚申塚商栄会へ。現地から駆けつけた新庄まつり実行委員会の面々が先頭に立ち、行進を繰り広げる。

続いて山車、囃子が姿を現す。綱を握り山車を曳くのは、事前に応募した豊島区民や山形県出身者などだ。時折強さを増す雨風にもひるまず、商店街や見物客の歓迎を受けながら、力強く歩を進める。

やがて第1関門となる都電荒川線の踏切へと差し掛かった。一つ間違えば事故になりかねないスポットだ。誰もが固唾を飲んで見守る中、架線に引っかかることなく、踏切の緩い勾配や、線路の凹凸もゆつくりと越えていった。

踏切を渡り、2つめの商店街である巢鴨地蔵通り商店街へ。ここで道路は2車線から1車線へと切り替わる。道幅をめいっばい使って進むため、学生たちが歩行者に注意を呼びかける。

とげぬき地蔵尊（高岩寺）や眞性寺など、巢鴨を象徴するスポットを、新庄まつりの山車が練り歩く。「新庄市と巢鴨の連携ここにあり」を感じさせる光景といえよう。

そして先頭の1台のみ、3つめの巢鴨駅前商店街へ繰り出して行った。白山通り（中山道）と交差する駅前交差点に突入し、7車線ある通りを大横断。駅前ロータリーを

密着取材! 歴史絵巻の山車が巢鴨の商店街を縦断!



一巡して、巢鴨の中心で新庄まつりを存分にアピールした。

その後3台は、元来た道へUターン。日が暮れはじめると、山車はライトアップされ、馬の目が鋭く光り、桜は燃えるような夜桜に大変身。燃え盛る炎のように輝きながら、山車は無事大正大学へと帰還した。

翌日は荒天のため、巡行は大学構内のみと規模を縮小して行われたが、雨にも負けず楽しませてくれた祭りの担い手たちに、場内からは惜しみない拍手が送られた。

新庄市と巢鴨の人々が力を合わせ、成功へと導いた「新庄まつり in 巢鴨」。かわったすべての人々が、誇りに思える2日間となったに違いない。

COLUMN 1 山形のソウルフード 3000食のいも煮が巢鴨に登場!

山 形の秋の風物詩、いも煮会。大正大学構内では「大鍋いも煮会」が開催され、目の前で煮込む熱々のいも煮が、1杯500円（引換券持参で無料）でふるまわれた。

このいも煮会を担当したのは新庄市と最上町の役場職員ら。最上町は新庄市の隣り町で、新庄市同様、大正大学の提携自治体であることから、協力的体制が取られた。

いも煮は地域で具材や味付けが違い、日本海に面する庄内地方は味噌ベースで豚肉を使うが、新庄市や最上町がある内陸部は醤油味で牛肉を使用。きのこが2種類入るなど具だくさんだ。

すべて現地から持参した具材は、里芋500kg、牛肉130kg、板こんにゃく800枚など大量で、ネギを切るのも約10人がかりで3時間ほどかかったという。

4000食分の具材を準備したが、天気が災いし、実際には3000食ほどが提供された。山車に負けない力作のいも煮は、雨で冷えた参加者の体を温めてくれた。



COLUMN 2 新庄まつりを支えた 男たちの意気込み



木村 満さん
新庄山車連盟会長

祭継承のためにも巢鴨でのPR効果に期待したい
新庄市も少子高齢化が進んでいます。山車をつくったり曳いたりする人がいなければ祭りはできません。今回の祭りを見た東京に暮らす新庄市出身者の中には、「ふるさとに帰ろうかな」と思ってくれる人がいるかもしれません。新庄まつりを継承するためにも、巢鴨での効果に期待しています。



長倉 薫さん
新庄市商工観光課主査

今回をきっかけに町同士 真の交流が生まれるのが願い
祭りの準備のため巢鴨を7回も訪れ、巢鴨の皆さんとすっかり親しくなりました。今回の祭りだけで終わるのではなく、巢鴨の皆さんにはぜひ来年、新庄まつりを見に来ていただいたり、新庄市民が巢鴨の商店街にお邪魔したりと、地方と都市の真の交流が生まれればいいと願っています。



長島 眞さん
巢鴨駅前
商店街振興組合理事長

巢鴨に大勢の人が来てくれたことに感動
毎月、さまざまな会議などの場で相談しながら、ようやくこの日を迎えることができました。初めて本物の山車を見て、写真でイメージしていたよりも、はるかに素晴らしいものだわかりました。私も行進に加わったのですが、大勢の人が、ここ巢鴨に祭りを見に来てくれたことに大変感動しました。



根本大我さん
大正大学
地域創生学部2年生

新庄市の人とつながった かけがえのない思い出
祭りを無事に終えることができ、感謝無量です。新庄市でお世話になった若連の人たちと、新庄と巢鴨で場所は離れていても、祭りに向けて心が通じあっている感覚がありました。「よくやってくれたな」と声を掛けてもらうなど、人と人とのつながりが忘れられない思い出になりました。